

# 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

— 接続と連携を意識した実践の取り組み —

今号の「教育情報ナビゲート」では、小学校・中学校・高等学校で社会科、地歴・公民科を担当されている先生方にお集まりいただき、『学習指導要領』で求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、どのような取り組みをされているのか、その実践における工夫と、経験を通して見えてきた課題、さらに小・中・高の接続から大学入試、そしてこれからの世界で生きていく社会人としての育成までも見据え、日々考えておられることについて語り合っていました。

（座談会は2024年10月に行いました）

座談会にご参加いただいた先生方



新宅直人先生 山本葉月先生 五十嵐和也先生

## 1 小・中・高それぞれの立場から

一本日は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践とはどういうものなのか、今後どうしていったらいいのか、小・中・高それぞれの立場で、お話ししたいと思います。まず、ご勤務されている学校では、どのような取り組みをなさっているのでしょうか。

**新宅先生** 私は杉並区立天沼小学校で5年生の担任をしています。小学校では3年生から社会科が始まるのですが、私たちは「主体的・対話的で深い学び」の実現という観点から、勉強が得意な子も苦手な子もそれぞれが自分で取り組めるような授業を目指して研究を行っています。社会科は、答えが1つではないので、例えば「資料を見て気付いたことは何でも発表していいよ」と伝えるなど、みんなが参加できるような工夫をしています。

**山本先生** 私は中高一貫校である東京都立立川国際中等

教育学校で中学校の社会科と高校の「地理総合」・「地理探究」を受け持っています。生徒たちの学力の幅は広く、そこは他の公立校と同じだと思いますが、本校は高校受験がないので、中学校では覚えるべきことは自分たちで覚えてきてもらって、授業ではちょっとヒントを与えて、あとはみんなでどんどん意見を出してみよう！ というようなアクティブ・ラーニング的な学びを積極的に取り入れています。新宅先生がおっしゃったとおり、社会科は正解を気にせず思ったことを言い合える教科なので、社会科が得意な生徒だけではなく、より多くの生徒が発言できるような授業を目指しています。

**五十嵐先生** 私は昨年までは都立高校で、今年度からは私立の成蹊中学・高等学校で高校の「地理総合」と中学校の社会科を教えています。高校の「地理総合」は以前の「地理A」に比べて、探究につながる深い学びがやりやすくなったと思いますが、2単位という限られた授業時間

の中ですべて探究的な学びとするのはなかなか難しい。課題を与えればこなしていける生徒もいる反面、こなせない生徒との学力差が広がる懸念もあります。

また、初めて中学生を教えて感じたことは、「中学校って大変だな！」と

**新宅 直人先生**

杉並区立天沼小学校

教員歴：18年目、専門：小学校社会科・初等社会科教育、趣味：サイクリング、釣り、燻製づくり

**山本 葉月先生**

東京都立立川国際中等教育学校

教員歴：15年目、専門：ヨーロッパ地誌・都市地理学、趣味：旅行と語学

**五十嵐 和也先生**

成蹊中学・高等学校

教員歴：14年目、専門：社会地理学・社会科教育、趣味：まちあるき



ということです。しっかり目を配らないと、ついてこれない生徒が出てきてしまう。ただ、中学生は高校生よりは既有知識の量によらず自由に発言してくれるので、主体的な学びという点ではやりやすい面もあると感じています。

## 2 中・高の接続と子どもたちが見ている世界

—社会科とりわけ地理の授業で生徒さんと接するなかで、中学生と高校生の違いを感じたことはありますか。

**五十嵐先生** 中学生も高校生も、国名などは把握していても、地図で表現した問題を出すと正答率がかなり下がります。ですから、位置関係と事象を結び付けることの難しさは共通してあると思うのですが、特に中学生は空間的にざっくり把握することが難しいようです。例えば、農業の主題図を見せて「これは研究者が大まかに引いた線で、ここできれいに畑作と稲作が分かれているのではない」と説明しても納得してもらえないこともあります。

**山本先生** 中学生は大体の感覚ではなく「これはこう」と明確に、例えば「中国は緯度何度以北が畑作！」と教えてもらったほうがスッキリする生徒が多いようですね。とはいえ、実際にこのように明確な区分はできないし、必要でもないということを生徒たちに伝えるのには苦労します。地理的な空間事象の把握については、繰り返し考えさせることで、その能力が身についていくものではないかと思っています。

**五十嵐先生** 本校では、中学生まではきちんとノートを作るよう指導するので、自分なりに地図を書いてまとめるなかで、ある程度は空間事象の把握が身についていくということはあるようです。

## 3 個別最適化が進んでいる小学校

**新宅先生** 本校ではノートの指導をしっかりやっていたのですが、2、3年前から一気に流れが変わりました。杉並区では授業支援ツール「ロイロノート」を導入しているので、私の授業ではノートは紙でとってもタブレットでとってもいい、提出も好きなほうでいいよ、と伝えています。子どもたちが自分で学習しやすいスタイルを選ぶ個別最適化は、小学校では相当広まってきていると感じます。

**五十嵐先生** 紙だけだったときと、デジタルを取り入れてからとでは違いはありますか。

**新宅先生** 今の小学生はタイピングが速いですからね。紙だと書くのが苦手だったり、書くスピードが遅かったりする児童も、タブレットだと速くきれいに書くことができるようになったということはあります。

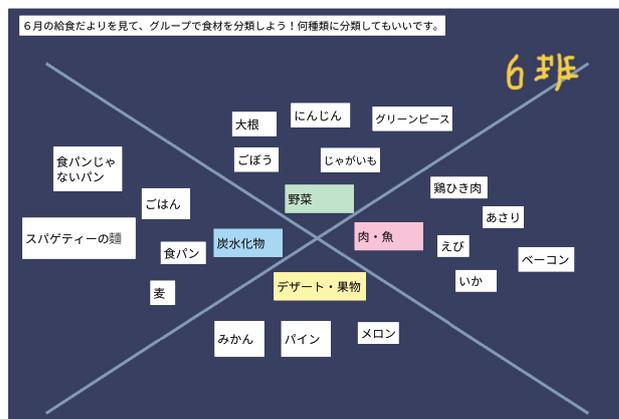


図1 「ロイロノート」の共有ノート機能を使って班で作成した給食の食材分類の例 提供：新宅直人先生

## 4 先行して新課程が始まった小・中学校

—高校は新課程に移行したのが2022（令和4）年。小・中学校では、それぞれそれに2年、1年と先行して行われています。今の小学校、中学校の学びがどのようになっているか、教えてください。

**新宅先生** 小学校では『学習指導要領』の改訂とGIGAスクール構想でのデジタル端末導入がほぼ同時で、授業スタイルの変更がしやすかったかもしれません。そのなかで、グループ活動や協働的な学びは、ずいぶん増えました。本校でも以前は一斉授業と協働的な学びの割合は「8：2」くらいでしたが、今は「6：4」くらいになっているかもしれません。

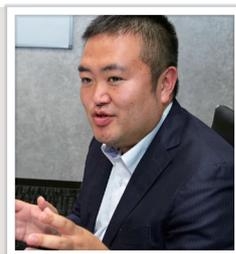
例えば、図1は「ロイロノート」の共有ノート機能を使い、班でわいわいやりながら給食の食材を分類したものです。「じゃがいもはこっちな？」などと言い合いながら、みんなで共有しながら操作しました。これは、日本の食料生産を概観するという単元で、ここからそれぞれの産地調べなどをして、米づくりや水産業などに進んでいくという流れになります。

—給食を教材に使われたのは、身近なものの方が、子どもたちは考えやすいからということでしょうか。

**新宅先生** 小学校では「学習のスタートは身近なところから」とは、よくいわれるところです。ただ、それだけだと子どもから離れた教材が使えなくなってしまうので、ずっとそればかりではよくないと思っています。

「履修かつ必ずしも大学入試に直結しない「地理総合」は、工夫次第で「深い学び」を実現できる科目でもある」

—五十嵐先生





『学習指導要領』にもあるように、主体的な学びは、見通しと振り返り。そこを主体性の第一歩として考えたい」

—新宅先生

**五十嵐先生** 身近なものからスタートするというのは、私もやります。「地理総合」では、大項目 B「国際理解と国際協力」の中で「地球的課題と国際協力」という中項目がありますが、「地球的課題を考えよう」といっても、それだけでは他人事も甚だしいまま終わってしまいます。ですから「自分たちに関係があるものを真剣に考えよう」としないと、ひどく他人行儀な解決策しか出てきません。例えばブラジルの森林破壊について考えるときには、普段食べている大豆や肉はどこから来るのか？ といったことも話さないと、その背景にある事象を考慮せず、ただ森が開発されて熱帯林が減少しているという授業になりかねないと思います。地理的な見方・考え方を働かせるということが、やはり重要であると考えます。

**山本先生** 課題解決的な学習を身近なところから話し合わせるのは、私もやってみたのですが、どうしても視点が限られてしまう。ブラジルの人がなぜ木を切ってしまうのか、日本の中学生にロールプレイングさせても理解が届かない部分があります。生徒には、話し合いの基盤となるしっかりとした知識、多面的・多角的な視点を与えることが重要なのではないのでしょうか。

そこで私は最近、資料を与えてそれを基に考えさせる方向にシフトしています。ブラジルの例でいえば、ブラジルの大豆輸出額の推移を表した資料を見せて「大豆の輸出で彼らは利益が上がっているんだよね。だから、彼らは木を切らざるをえないんじゃないか？」といった思考を可能にする授業です。

## 5 「主体的に学習に取り組む態度」の育成に向けて

一評価の3観点「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の中でも、「主体的に学習に取り組む態度」の育成についてはいかがでしょうか。

**新宅先生** 私たちの学校では、単元計画の中でしっかり組み込むようにしています。1・2時間目で疑問を出させ、単元を通してどのようなことを学ぶのかをまず決めます。その後、3・4時間目で追究し、5・6時間目でまとめる。小学校では比較的時間に余裕があるので、最初にそれぞれの児童がどのような疑問を出し、その後、主体的にどう追究していったかを追跡して見るができるわけです。

教科書・P.32~33

### 世界各地の人々の生活と環境（1）

目標：「\_\_\_\_\_」地域での生活の特色を資料から読み取ろう。

下の左側2つ雨温図が示す都市を含む地域の写真として近いと考えられるものを下から1つ選び、記号で答えよう。

ブラジル・リオデジャネイロ

南極大陸

東京

参考④

A

B

C

D

この地域での人々の生活を予想しよう

①衣(服装の特色)	②食(食べているもの)
③住(住居)	④その他

資料から読み取り、検証しよう

①衣(服装の特色)	②食(食べているもの)
③住(住居)	④その他

図2 中学校での客観資料からの読み取りワークシートの例（一部改） 提供：山本葉月先生

**山本先生** 図2 は中学校地理的分野の「世界各地の人々の生活と環境」の導入で使ったワークシートです。まずは、生徒たちが初めて見る雨温図とイメージしやすい象徴的な写真を結び付けさせて、客観資料の読み取りをさせるというような練習から入るといった工夫をしています。資料から読み取ったことを、客観性のある言葉にするのは、慣れていない生徒たちにとってかなり難しいことです。私は「ワークシートは正解だけを書くものじゃないんだよ。間違ってもいいから枠を使って“整理”して行って」と言うように気を付けています。しかし、そうやって生徒たちが書いた言葉の変化から、生徒個人の変容を読み取るのはすごく難しい。ワークシートの記入内容の変化から主体的な追究の過程が分かる生徒もいますが、そうした主観の入りかねない方法で生徒を評価することは平等性の担保という点で問題があるのではないかと感じています。

一高校では身につけるべき「知識・技能」がたくさんある。それをベースに「思考・判断」を問うことは、定期考査でも可能だと思いますが、「主体的に学習に取り組む態度」の

「小学校では、間違ってもいいから自由に意見を言う、それをお互いに許容するという習慣を身につけさせてくれると、中学校としてはうれしいですね」

—山本先生



評価についてはどうお考えですか。

**五十嵐先生** これまで高校の先生方が主体性を評価する主な材料はノートが多かったと思うのですが、「ロイロノート」や帝国書院の「まとめも」\*のような新しいデジタルツールを活用することがこれからは重要になると考えます（**図3**）。従来の一斉講義型の授業の中で「はい、誰さん」と指名してもその人だけが回答することになります。こうしたツールを活用すれば、全員が自分なりに考えて、回答もリアルタイムに共有できる、そこからおもしろい意見を発掘するといったことも可能になります。

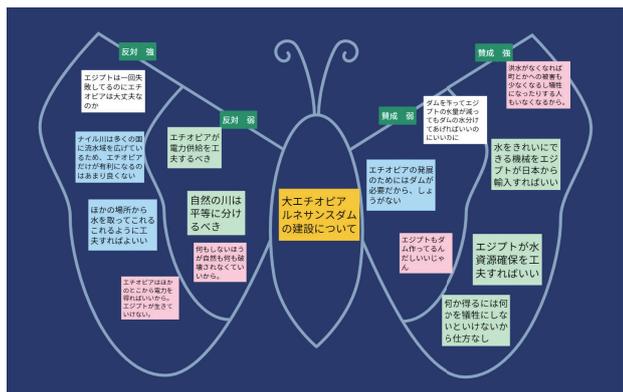
**山本先生** デジタルツールは匿名性を保ちやすいのもいいところだと思います。自由な発言をしやすくなります。

**新宅先生** 共有して話し合うことは対話的ではありませんよね。ところで、われわれも「主体的な学び」とは何かということを校内研究で取り組んできました。当初、主体性のイメージは先生によってバラバラでしたが、その中で一つ分かったことがありました。それは「主体性には時間の概念がある」ということです。例えば、見通しを持つ、継続する、粘り強くやる、そういう時間軸が主体的な学

びと関連しそうだということが見えてきました。つまり、主体性を育むためには、子どもたちが自分の学びを俯瞰して見るのが大事だと。今、自分が何を学んでいるのか、次の時間では何をするのか、少し先のことまで見通して学ぶ力をつけさせることがすごく大事なのではないのでしょうか。その力を小学校で身につけさせ、中学校ひいては高校へと送り出すことができればと思っています。

**山本先生** 私は中学校のワークシートで、単元の振り返りや見通しを書かせるのですが、授業で分かったことだけを羅列するのではなく、最初に示している「単元目標の達成のためにあなたが分かったことは何ですか？ 次は何が分かればもっとその目標に近づけますか？」という問いに、生徒が応えてくれるといいと思っています。

**五十嵐先生** そうですね。自分で学習のここまではできているが、ここからできていないといったことが把握できるような生徒が育てば、単元で教えるのは1つのトピックでもいいはずで、それを自分なりに深めていけるような生徒となってくれば、それが本当に「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる理想的な姿ですね。



**図3** 「地理総合」で「ロイロノート」を使って課題解決型学習を行った例 『ChiReKo』2024年度1学期号掲載 提供：五十嵐和也先生（前任の東京都立富士森高等学校での実践例）

いかがでしたでしょうか。小・中・高の連携と接続、その先の大学受験の在り方など、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践と議論は、まだまだその探究の途上にあるといえるでしょう。『ChiReKo』では、これからもこうした探究の場を設けていきたいと考えています。先生方のご意見をぜひお寄せください。（編集部）

ご意見・ご感想はこちらから→  
Webのアンケート・フォームから簡単に入力できます。

**座談会を振り返って**

「社会科は日本や世界を担う人材を育てていくための重要な教科」－新宅 直人先生－  
校種は異なっても、社会科がこれからの日本や世界を担っていく人材を育てていくうえで非常に重要な教科であることを改めて感じました。小学校社会科では、まずは子どもたちに社会科という教科を好きになってもらうこと、そして社会的な見方・考え方を働かせることを大切に授業づくりを目指していきたいです。

「目の前にいる生徒の力を伸ばすことのできる授業を目指したい」－山本 葉月先生－  
小学校での最新の動向や、他の中高一貫校でどのような教育がなされているのかを大変具体的に知ることができました。教育活動の現状はもちろん、目指す児童・生徒像を共有できたことで、生徒の経験や未来にも意識を向けながら、目の前の生徒の力を伸ばすことのできる授業を目指していきたいとの決意を新たにできました。

「知識・技能を活用し、気づきが得られる機会を増やしたい」－五十嵐 和也先生－  
小学校の授業でICTの活用、対話の場面が増えていることに驚きました。大学教育との接続も考えると、高校の地理教育が変わる必要性を感じました。大学入試に向けて知識・技能の定着を図りつつ、それらを活用する場面（主体的・対話的）と気づきが得られる（深い学び）ような教育の機会を増やしていきたいです。

\*帝国書院令和7年度以降用中学校デジタル教科書・教材に搭載される思考ツール。詳しくはこちら▶ <https://www.teikokushoin.co.jp/jhs/07digi/>